

聖書:エペソ人への手紙3章1～13節

説教:キリストに対する信仰により

はじめに

最初にひとつだけ皆さんにお伝えしたいことがあります。函館の花園キリスト教会の吉田誠先生から、同教会のS姉妹が中央区の施設におられるので一度尋ねていただきたいとの依頼を以前からいただいております。それで、先週、弟さんご夫妻が函館から面会に来られるというので、私も一緒にすることになりました。行く途中、道に迷い、約束の時間から四十分も遅れて、大変申し訳ないことをしてしまいました。S姉は三年前にイエスを救い主と告白し、札幌のご自宅で洗礼を受けられ、それから間もなくいまの施設に移られたということです。教会生活はもちろんですが聖書の学びもされておられない。それでも今日のタイトルにあるように、「キリストに対する信仰」によって、救いをいただきました。素晴らしいことです。

しかし、世間一般の人たちの受け止めは違うでしょう。キリストに対する信仰だけで救われる。そんなうまい話があるはずがないと疑います。またその一方で、ただ信じるだけよいと言われても、かつての救われる前の自分がそうであったように、これもなかなか難しい。そんな自分だったのに、いまは救われてこうして教会の椅子に座っている。考えてみればたいへんな恵みであるわけです。ふだん忘れがちなことですが、私たちはどのような恵みをいただいているのか、ともに確認していきます。

1 パウロ

1) エペソ教会の長老との別れのあいさつ

1節でパウロは「あなたがた異邦人のために、私パウロはキリスト・イエスの囚人となっている」と語っています。囚人という表現はたとえて言っているのではなく本当に囚人だった。どうして囚人になったのか、いきさつはこうです。かつてパリサイ派の若き指導者であったパウロが、ダマスコの途上でイエスに出会ったことをきっかけに、百八十度方向を変えてキリスト教の伝道者となったことは、ご存じの通りです。これを苦々しい思いで見ているのが、かつてパウロが属していたユダヤ人グループで、パウロへの妨害活動は日増しに激しくなっていく。パウロもいのちの危険を覚悟したのでしょうか。三回目の伝道旅行が終えてエルサレムに戻る途中、わざわざエペソ教会の長老を呼んで最

後の別れをする。その時パウロはこう言った。使徒の働き20章22～23節。「ご覧なさい。私は今、御霊に縛られてエルサレムに行きます。そこで私にどんなことが起こるのか、分かりません。ただ、聖霊がどの町でも私に証しして言われるのは、鎖と苦しみが私を待っているということです。」

これを聞いた長老たちはパウロを引き止めようとしませんが、パウロの決意は固く、それで最後は泣きながらパウロを見送ったと書かれています。パウロがエルサレムに戻ると、心配したとおりにユダヤ人グループの訴えにより逮捕され、ローマで裁判を受けることになり、ローマに護送されて裁判が始まるまで軟禁状態にされた。そのときにこの手紙を書いたので、自分のことを「囚人」だと言ったのです。

2) この福音に仕える者となった

エペソ教会の長老たちの姿を思い浮かべながら、パウロはなんとか励ましたいと思つてのことなのでしょう。13節でこう言う。「ですから、私があなたがたのために苦難にあつていることで、落胆することのないようお願いいたします。私が受けている苦難は、あなたがたの栄光なのです。」

パウロが苦しめば苦しむほどそれはあなたがたエペソ教会の栄光、名誉になると言う。

パウロが苦しむこととエペソ教会の栄光。一見、なんのつながりもないように見えます。鍵となるのは7節です。「すべての聖徒たちのうちで最も小さな私に、この恵みが与えられたのは、キリストの測り知れない富を福音として異邦人に宣べ伝えるため(です。)」パウロは異邦人に福音を宣べ伝えるために召されたと自覚しています。こんな小さな者にも恵みが与えられたのは、この働きのため。その与えられた恵みを福音として異邦人であるエペソの人々に語りました。その結果、パウロは逮捕され囚人となってローマに送られていく。それは悲しむべきことのように見えるけれど、異邦人に福音を語るという自分に与えられた使命が果たされたという証明でもあるわけです。だから栄光だと言った。

ではどんな恵みをパウロはいただいたのでしょうか。

2 キリストの奥義

1) 旧約の時代は知らされていなかった

そのことは、3, 4, 5節に何度も繰り返される「奥義」ということばと関係があります。奥義と聞くと私が救われた最初の頃を思い出します。私はそのとき、教会には牧師だけが知っていて一般信徒には知らされていない秘密があるのではないかと、思っていたのです。もちろんそんなものはなくて、聖書にはっきり書いてある。5節。「この奥義は、前の時代には、今のように人の子らに知らされていませんでしたが、今は御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されています。」

二つのことが書いてあります。一つ目。「この奥義は、前の時代には、今のように人の子らに知らされていなかった。」旧約の時代、ある特別な人を除いて、ほかの人たちには知らされていなかった。確かにそうですね。旧約聖書を開いても、イエス・キリストや十字架が直接に出て来ない。出てきたとしてもなにかぼんやりとしていて、はっきりとしない。キリストが隠されている。そんな印象です。それが今どうなったのか。「今は御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されています。」それでパウロも奥義を知ることとなった。その奥義をパウロが伝えたので、みなだれもが知るることとなった。ですから牧師だけしか知らない秘密というものはありません。

2) 異邦人も共同の相続人となる

ではパウロが知らされた奥義とはなんであったのか。なにか驚くようなことを期待しますが、答えは6節です。「それは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人も共同の相続人になり、ともに同じからだに連なって、ともに約束にあずかる者になるということです。」

イエス・キリストの救いは、ユダヤ人であろうが異邦人であろうがなんの差別もなく、同じように与えられる。これが奥義だった。「奥義、奥義」と言って期待を持たせた割には、なにか拍子抜けしたかもしれません。しかし、パウロの時代のことを思い起こしていただきたい。イエスのもとで三年半も訓練を受けていた使徒たちでさえ、ユダヤ人も異邦人も救いに区別がないということは、当初は信じられなかったのです。使徒たちが集まって、なにか話し合いをし、神は異邦人も同じく救おうとされていると確認して、やっと教会がこの事実を受け入れていった。使徒たちでさえこうですから、ましてほかのクリスチャンではないユダヤ人たちは、異邦人が救われることなど言語道断

です。ユダヤ人たちが、異邦人に対して伝道するパウロに腹を立てたのには、このような背景があったからです。パウロのしていたことは、当時の人々にしてみれば天地がひっくり返るくらい常識はずれだったということです。

3 キリストに対する信仰により

1) 二つの恵み

①異邦人でも救われる

ユダヤ人も異邦人も救われるということが、奥義であった。このことは私たちとどのようなつながりがあるのか考えてみましょう。私たちはなんの疑問も抱かずに、安心してここに座っています。当たり前のように思えますが、旧約の時代の人々が見たら、実は腰を抜かすようなことだったはずで、そのことを考えると、私たちは少なくとも二つの恵みをいただいていたことに気がつきます。

一つ目。ユダヤ人でもない自分が神を信じて救いに与ることができた。私たちには当たり前のことのように思っていたことですが、実はこれも神の恵みによることでした。

②大胆に神に近づくことができる

二つ目の恵みは12節にあります。「私たちはこのキリストにあって、キリストに対する信仰により、確信をもって大胆に神に近づくことができます。」

罪を犯したアダムが、神から「あなたはどこにいるのか」と問いかけられた時、木の陰に身を隠しました。神が恐ろしかったからです。すべての人はこのアダムの罪を受け継いでいるので、神と聞くと恐ろしい存在とってしまいます。

私もかつてそうでした。キリストを信じる前、いろいろなところに神が宿っているのではないかと考えていました。なにか願い事があればそのような神々に願い、なにか悪いことが重なれば、お祓いをしてもらって神々の怒り鎮めてもらい、神々の障(さわ)りを払い落としてもらう。神とは、近寄りがたくて恐ろしい存在で、大胆に近づくことなどとんでもない。そんなことをしようものなら大変なことになる。そういう存在でした。

ところが聖書の神はどうか。確信をもって大胆に神に近づくことができる、と言うのです。アダムが神を恐れて身を隠していたのに、どうして私たちは大胆に近づくことができるようになったのか。

2) キリストによる和解によって

その理由は2章16節にすでに書かれていました。
「二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」

イエス・キリストは罪を滅ぼし、信じる者の罪が赦してくださった。もう神と私たちの間には隔ての壁がなくなり、神は恐れ存在ではなくなった。それで大胆に近づくことができる。それはわかりました。では実際に私たちはどのようにして大胆に近づくのでしょうか。「私は神に大胆に近づいています」という実感がありますか。おそらくあまりないのではないか。でも皆さんは祈る時に、こう言いませんか。「神さま。」ごく自然に、あたかも親しい友人のように語りかける。相手は神です。考えてみればこれこそ大胆の極みです。その祈る内容もどうですか。「私は神に対して罪を犯した罪人です。」考えてみれば神さまに対してこんな失礼な話はない。でも私たちはそんなことは気にしません。パウロが言うように、大胆に近づくことができる。いつからこんなことができるようになったのか。私たちが、キリストを信じたときからです。キリストに対する信仰によって、こんな恵みをいただくようになった。

最初にお話ししたS姉は、三年前、牧師とお兄さんから聖書の話聞いて、ただ単純に「キリストを信じます」と告白して救われたと伺いました。私たちは信仰と聞くと、頭の中でいろいろ難しいことを考えたくくなります。でも、ただこれだけなのです。「私は罪人です。イエスキリストこそ私たちの主です。罪からの救い主です。」このように告白できる。これこそ神に何も恐れずに、大胆に近づくことができるから言える祈りです。この恵みを覚えて、この一週間を歩んでまいります。